



うちょうてん

## 「有頂天」

生活の中の仏教語

曹洞宗布教師 真山 隆道 師

欲しい欲しいと思っていたものが手に入った時や、苦勞に苦勞を重ねてやっとの思いで成功した時、厳しい競争に勝利した時など、これ以上の喜びはないというような、得意満面の様子を現す言葉ですが、これが仏教から出た言葉であることをご存知でしょうか。

仏教では、凡夫が修行を積み重ねることにより、「欲界」から「色界」。「色界」から「無色界」へと進んで行くと説きます。

「欲界」とは、欲望の支配する世界で本能的欲望が盛んで強力な世界を表します。

「色界」とは、「欲界」の上に在って、汚れを離れた、物質的なものがすべてが清浄なる世界で、「初禅天」「二禅天」「三禅天」「四禅天」に分けられます。

さらに「初禅天」「二禅天」「三禅天」は『三天』に分けられ「四禅天」は『九天』に分けられています。

この「四禅天」最後の九天の最頂上を「色究竟天」と言い、別名を「有頂天」と言いますが、「有頂天」は、いまだ「色界」に属しており「無色界」には属していません。

「無色界」は、「色界」の上にある精神だけの世界を表します。

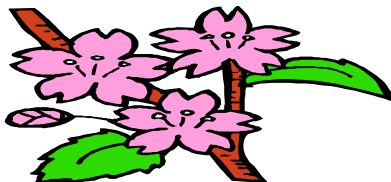
つまり、九天の最頂上が「有頂天」ではありますが、「無色界」には到達していない状態を言います。にもかかわらず、いい気になって有頂天のまま、修行を怠ったり、邪念を起こしたりすると、九天から転落してしまうことになります。

これを「九天直下」と言い、次には「無色界」に入れるという、天界のかなり上から、まっ逆さまに落ちることを意味しています。

世の中の、名人、上手と言われる方々のお話を聞くと、いかに賞賛されようとも、それぞれの道に、「さらに精進、努力して行きます。」と、答えられる姿には感心をさせられるものです。

仏教では、はしゃぎすぎや、慢心を戒めておりますが、「勝って兜の緒を締めよ。」のことわざが示すとうり、あるいは、「驕れる者久しからず」と言われるとうり、有頂天にあるときにこそ、用心が大切なことは、よくよくお解り頂けたでしょうか。ご用心。ご用心。

曹洞宗 宮城県布教師協議会会員  
(仙台市 長泉寺住職)



# 葬にまつわる体験談

## 「死に直面した家族を見て」

[長崎県 女性 会社員 26歳]

無理がたたって肺炎をおこして入院した3日目のことです。私の病室はナースステーションに一番近いところ、いわゆる重病の方が入るところでした。ベットが空くまでの5日間ということだったのですが、その5日間に私は2人の方の死とカーテンごしに直面したのです。

最初の方は半年以上も入院されていて、私が来たときには、もう何もわからないような状態で、家族の方もさすがに疲れておられました。奥様と娘さんの交代の看病でしたが、娘さんは昼は看病、夜は仕事というハードな生活だったようです。

もちろん、ある程度の覚悟はできていたと思いますが、亡くなられた時のあの悲しそうな声。自分の生活も犠牲にして過ごした半年間。これで楽になるだろうに、それでも父親の胸を何度も何度も叩いて、「お父さん、お父さん」と何度も何度も呼びつづけて。思わず涙をそそられてしまいました。それでいて母親を庇いながら荷物の整理をして、これからの自分のとるべき行動を考えているような姿勢に、あらためて感心しました。

2人目の方は、急激に悪化したらしく、私たちの部屋にきて2日もたたないうちに亡くなりました。あっという間の出来事でしたが、私が胸をうたれたのは奥様の言葉です。「お騒がせしました。迷惑をかけました。あなたも早く良くなってね。」涙っぱいの目でそう言われた時は、さすがに言葉がでませんでした。こういう時に他人を気遣うなんて私に出来るだろうか。

今回の出来事で強く感じたのは、こういう時こそ毅然とした態度で接さなければならないということです。ほんの何日という短い間で感じたことを頭の隅に残しておいて、これからの生活に生かそうと思っています。

[セキセー（葬にまつわる体験談）引用]

## 歳時記

### ・・・「端午の節句」・・・

端午の節句とは？

「端午の節句」は、奈良・平安時代から続く行事ですが、起源は古代中国に遡ります。「端午」とは、月の端(はじ/はじめ)の午(うま)の日と言う意味で、5月に限ったものではありません。午と五の音が同じ事からやがて5が重なる重五の日、つまり5月5日になったと伝えられています。当時の日本では季節の節目に薬草を摘み、それを臣下に配ったり、悪鬼を退治する意味で午(うま)から弓を射る儀式も行なわれたようです。

端午の節句は菖蒲の節句

古代中国では、端午の節句の日に蘭の湯に浸かり、菖蒲を浸した酒を飲み健康と厄除けを願いました。この行事が後に日本の宮中から鎌倉の武家社会へと広がります。武士は菖蒲を「尚武」(武をたつとぶ)とかけて端午の節句を尚武の節目の行事として盛んに祝うようになったようです。

どうして鯉のぼり？

江戸時代に入ると、幕府は5月5日を重要な式日として定め、大名や旗本はお祝いを携え、式服で江戸城に出向くようになります。これ以降武家に男子が生まれると門前に馬印(うましるし)や幟(のぼり)を立ててお祝いするようになりました。これらの風習がやがて庶民の間へと広がり、幟旗を立てることが許されていない庶民は、代わりに「鯉のぼり」をあげるようになったといわれています。